

# 認知的共感性と成人愛着の関連について

## —愛着回避に着目して—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 今野 仁博

筑波大学人間系 小川 俊樹

The relationship between cognitive empathy and adult attachment: From the perspective of attachment avoidance

Yoshihiro Konno (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Toshiki Ogawa (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba 305-8572, Japan*)

In this study, we first develop a new scale measuring cognitive empathy. Second, we examine the relationship between cognitive empathy and adult attachment from the perspective of attachment avoidance. One-hundred-and-five college students completed the questionnaires. The results of factor analysis revealed that the cognitive empathy scale is constructed from three factors. The scale had sufficient reliability, but only partial validity. Moreover, the results of regression analysis indicate that adult avoidance has a positive potential for restraining internal consciousness of others and that internal consciousness of others has a positive potential for promoting understanding of other's emotions and perspective-taking.

**Key words:** cognitive empathy, adult attachment, attachment avoidance

### はじめに

他者理解を深め、個人間の結びつきを強めたり、対人コミュニケーションを円滑にするためには共感性は重要な役割を担っている。例えば、共感性が向社会的行動を動機づける要因であること、そしてまた、攻撃性の抑制要因であることが注目されている。近年、共感性の多次的視点の導入が導入されてからは、共感性のどの構成要素が円滑な対人関係やコミュニケーションを促進させるのかについて検討されている。例えば、攻撃性の抑制に相手をどう認知するかが重要でもあり、認知的共感性が攻撃性の抑制要因の1つであることが示されている(川田・田中・杉浦・山田・今野・中島, 2007)。また、認知的共感性と向社会的行動との間に正の関連を示した研究(Litvack-Miller, McDougall & Romney, 1997; 登張,

2003) や、認知的共感性がグループ学習の効果的な話し合いに影響を及ぼすことも示されている(長田・川上, 2008)。ゆえに、認知的共感性に着目し、それと関連する要因を検討していくことも、より円滑な対人コミュニケーションの促進要因、また、対人関係上の問題や不適応を予防する要因をより明らかにすることで、より適応的な生活を援助していく上で重要な方策が見えてくるかもしれない。

そこで、本研究では、認知的共感性に焦点を当て、認知的共感性の個人差を規定する要因について検討する。

### 問 題

#### 1) 認知的共感性について

共感性に関する長い研究史の中で、共感性をどう

定義するのは研究者の考え方によって様々である。特に、認知的共感性とは他者の立場に立って物事を見て、他者の気持ちを理解するといった共感性の認知的側面を強調するものである。ここでは、まず共感性がどのように定義されてきたのかについて、先行研究を概観した後、本研究における認知的共感性について述べる。

**共感性についての先行研究の概観** 従来の共感性の概念定義は、他者の感情と同じものを自分の中で経験するといった感情的側面を強調する定義 (Stotland, 1969; Batson, 1987) と、他者の立場に立って物事を見て、他者の気持ちを理解するといった認知的側面を強調する定義 (Dymond, 1948; Broke, 1971) に大別される。感情的側面を強調する立場では、Stotland (1969) が共感性を「他者が情動の状態を経験しているか、または経験しようとしている認知したため、観察者に生じる情動的反応」と定義した。一方、認知的側面を強調する立場では、Dymond (1948) が共感性を「他者の思考・感情・行為の中に自分自身を想像的に置き換えて、その人のあるがままの世界を構成すること」と定義し、Broke (1971) は「他者の心的・情動の状態を理解する認知能力」と定義し、他人について正確な知覚をすることと同義した。また、各立場の定義に基づいて、共感性を測定する尺度も開発されてきた。例えば、感情的側面を強調する立場では、Mehrabian&Epstein (1972) の Questionnaire Measure of Emotional Empathy (QMEE) があり、認知的側面を強調する立場では、Hogan (1969) の the Empathy Scale がある。

近年では、共感性の感情的側面と認知的側面の両方を統合して共感性を捉える定義が主流となっている。例えば、Davis (1994) は共感性を「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と包括的に定義し、共感性の認知的側面と感情的側面の両方を含めた。つまり、共感性は単一の構成概念ではなく、共感性の認知的側面と感情的側面の両者はお互いに影響し合う多次元の構造を持った構成概念として捉えられた (Davis, 1994)。また、Davis (1980, 1983) はこの多次元の視点に基づき、共感性の尺度として対人的反応性指標 (The Interpersonal reactivity Index; IRI) を作成し、これは今日、IRI は共感性を測定するための尺度として一般的に広く用いられている尺度の一つとなっている。IRI は4つの下位尺度、つまり、「視点取得」「想像性」「共感的関心」「個人的苦痛」から構成される多次元的な尺度である。「視点取得」とは、日常場面で他者の心理的視点に立つことを意

味する。Hoffman (1982) もこの他者の視点や立場に立つことを重要視し、「役割取得」と概念化した。Hoffman の「役割取得」は Davis の「視点取得」にはほぼ対応しているとされている。「想像性」とは、本や映画など架空の登場人物の気持ちや行動に自分自身を当てはまることを意味し、自分が他者の抱いている気持ちになったかのように同一化することと言える。「共感的関心」とは、他者に対して同情や配慮、関心を示すことを意味し、特に不運な他者に対して暖かい感情や配慮を持つという他者志向的なものと言える。「個人的苦痛」とは、他者の感情への反応として自分が不快な感情を抱くことを意味するが、特に他者が苦しんだり、援助が必要な緊張した場面で不安や動揺を抱くという自己志向的なものである。これら4つの構成要素の中で、特に「共感的関心」と「個人的苦痛」は自分が他者の感情に対して代理的に共有・反応するものであり、共感性の感情的側面に関するものである。一方、「視点取得」と「想像性」は共感性の認知的側面に関するものであり、他者の立場に立ちやすいことなどが他者の心理状態について正確に理解することに繋がると考えられる。さらに、Davis 以外にも、今日まで多くの研究者によって、多次元的なアプローチから共感性の個人差を測定する尺度が積極的に開発されており、多次元視点からの共感性研究が定着しつつあると言える (鈴木・木戸・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田, 2000; 登張, 2003 など)。例えば、鈴木ら (2000) は共感性を「他者のポジティブ及びネガティブな経験について、推測から理解を経て反応へ至る心的傾向及び認知能力」という定義に沿った尺度として多次元共感性尺度 (the Multidimensional Empathy Scale; MES) を作成した。MES では、「他者志向的情緒反応」「被影響性」「自己志向的情緒反応」は共感性の感情的側面を、また「他者心理の理解力」「対人的情緒に対する態度」「想像性」を共感性の認知的側面として測定している。その他、登張 (2003) は青年期用多次元特性共感性尺度を作成し、共感性を「共感的関心」「個人的苦痛」「ファンタジー」「気持ちの想像」の4つの構成要素に分けて測定している。また、出口・斉藤 (1990, 1991) の共感性尺度では、「他者の内面の推測」「苦しみ・悩みに対する共感」「シンボル・役割による共感」を、澤田・斉藤 (1995, 1996) の多次元共感性尺度では、「感情の理解」「役割とり」「同一化」「感情の共有と理解」「自己融合性」を共感性の構成要素として測定している。さらに、尺度作成には至っていないが、Hoffman (1987, 2000) や Feshbach (1987) は共感性の多次元性についての理論的なモデルを提

唱した。

本研究における認知的共感性について 従来、共感性の感情的側面または認知的側面のどちらかに焦点を当てるといった一次的に捉えることが多かった研究から、認知的側面と感情的側面を統合させて、共感性を複数の構成要素で捉えようとする多次元的なアプローチによる研究が主流となっている。この多次元的な視点に基づき、共感性の認知的側面および感情的側面に関しても、各側面をさらに幾つかの構成要素を幾つか想定しているが、上述通り、研究者の考え方によって、構成要素を幾つにするのかは様々であり、先行研究間で一貫していない。

共感性の認知的側面に関して、例えば、IRIにおける「視点取得」と「想像性」に関しては、「視点取得」が Hoffman の理論における「役割取得」や澤田ら(1995, 1996)の「役割とり」などとの対応が見られるが、「想像性」は対応が明確ではない。ただし、「想像性」に関しては、鈴木ら(2000)の「想像性」や登張(2003)の「ファンタジー」との対応が見られるが、鈴木ら(2000)は当初想定していた「視点取得」を因子分析結果では見出していない。また、澤田ら(1995, 1996)は「役割とり」の他にも、「感情の理解」を取り上げ、鈴木ら(2000)の「他者心理の理解力」とほぼ対応が見られる。元来、共感性の認知的側面とは、Dymond(1948)やBroke(1971)の定義にあるように、他者について正確に理解することと同義としている。特に、他者についての正確な理解に関しては、Feshbachの共感モデルにおいて重要な位置づけになっている。そのモデルによると、共感性を成立させるために3つの水準が提唱されており(Feshbach, 1976)、その3水準とは、1)他人の情動状態を弁別し、それを命名する能力、2)他人の考えや役割を予測する能力、3)情動を共有し、現に自分の見ている否定的あるいは肯定的な情動を経験する能力である。また、Hoffman(1982)も役割取得能力には、自己と他者の心理状態を区別し、ラベリングする能力が必要であるとしている。このことから、共感性の認知的側面の構成要素を想定するにあたって、視点取得(または役割取得)や想像性以外にも、他者の感情状態を推測・理解することを捉え得る構成要素の存在が必要であると言える。さらに、現在一般に広く使われている共感性を測定する尺度の一つであるIRIの問題点として、共感性の4つの構成要素しか測定できていないことも指摘されているため(Davis, 1983; 鈴木ら, 2000)、IRIの認知的側面である「視点取得」と「想像性」以外にも、他の認知的側面を捉え得る構成要素を想定する必要性があることを示唆するものである。

以上のことから、共感性の認知的側面の構成要素を想定するにあたって、視点取得(または役割取得)や想像性以外にも、他者の感情状態を推測・理解することを捉え得る構成要素の存在が必要であると言える。そこで、本研究では、共感性の認知的側面として、「他者感情の理解」「視点役割取得」「想像性」を想定し、これら3つの要素で構成される共感性の認知的側面を認知的共感性と呼ぶことにする。

## 2) 認知的共感性と成人愛着について

従来、共感性が様々なパーソナリティ変数とどのように関係するのかを検討するための研究が行われている(登張, 2000)。様々なパーソナリティ変数がある中で、個人がどのような愛着を決定するのかといった問題が感情的に重要な情報をどのように処理するのかといった事柄にも影響を与えられている(Collins & Read, 1994)。そのため、他者の感情状態を理解するといった認知的共感性の個人差を知る上で、愛着の視点も重要であると言える。ゆえに、本研究では、成人愛着の観点から、認知的共感性の個人差を規定する要因について検討するために、ここでは、まず成人愛着について先行研究を概観した後、成人愛着と認知的共感性の関連について述べる。

成人愛着について 愛着とは、動物行動学的な観察から導き出された概念であり、それは人間や動物が保護・世話が必要とする時期に、自分自身の安全性と生存性を確保するために、保護・世話・養育をしてくれる養育者との間に近接性を維持しようとする生得的な傾向であり(Bowlby, 1969, 1973)、“ある特定の他者に対して強い結び付きを形成する人間の傾向”として捉えられている(Bowlby, 1977)。つまり、子どもと養育者の間に形成される情緒的絆と言えるものである。

また、Bowlby(1973)は養育環境や養育者との関係によって形成される愛着の個人差についても示唆を与えている。Bowlbyによると、愛着の個人差は養育者との関係が大きく影響しており、特に養育者の情緒的応答性や子どもの要求への反応性が反映されている。このような養育者との関係・相互作用を通して、子どもは養育者と自分自身に対して、それぞれの主観的な信念や期待を形成させる。つまり、子どもは“自分は養育者に受容してもらえるのか、養育者は自分の要求に十分反応してくれるのか”といった養育者への信念や期待と同時に、“自分は愛される価値があるのか”といった自分自身に対する信念や期待を形成させていく。自分や養育者についての主観的な信念や期待といった心的表象は、養育

者との関係が内在化された心的表象であり、この心的表象を Bowlby は内的作業モデルと概念化し、さらに、この内的作業モデルが乳幼児期以降も児童期、青年期を通じて作り上げられ、その後は比較的安定した形で維持されるとした。つまり、乳幼児期に始まる自分や養育者についての内的作業モデルは、その後の対人関係にまで影響を及ぼし、自己ならびに（より一般的な）他者についての信念や期待、つまり内的作業モデルを形作っていくと考えられている。

以上のように、愛着の人生を通じた継続性が示唆されるが、それは Bowlby (1969, 1977) の愛着が“揺り籠から墓場まで”と述べたことに十分表されている。そしてまた、この愛着の継続性によって、成人を対象とした愛着（以下、成人愛着）研究も精力的に発展し、そこでは内的作業モデルという概念が重要な鍵になってくる。事実、成人愛着の研究では、成人愛着面接（Adult Attachment Interview; AAI）という半構造化面接による測定法が内的作業モデルの特質を把握するために開発された（Main, Kaplan & Cassidy, 1985）。この AAI では、個人を安定型、回避型、そしてとらわれ型の3つに類型化するが、AAI による手法によって、愛着の世代間伝達や継続性の妥当性を支持する結果も得られている（Fonagy, Steele & Steele, 1991；数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000）。

AAI の手法に見られるように、成人愛着の研究では内的作業モデルに焦点を当て、内在化された両親への心的表象を測定対象としている。しかし、内的作業モデルは早期の養育者との間で形成されながら、乳幼児期以降の一般的な自他の表象となり、対人関係における認知や感情、行動、さらには社会的適応性、パーソナリティ形成に影響を及ぼすとされている。この観点からすれば、成人愛着における測定対象が養育者（両親）への心的表象だけに限らず、現在の対人関係に影響を及ぼすとされる自己及び一般的な他者への期待や信念をも測定対象とすることも可能である。それゆえ、自己報告型による質問紙尺度を用いることで成人愛着の分類など検討してきた研究も多い。例えば、Hazan & Shaver (1987) は恋愛を愛着の過程であるという考えに基づき、恋愛対象への愛着スタイルを測定するための単項目尺度を開発し、安定型、アンビバレント型、回避型の3つに類型化した。また、Bartholomew (1990) は愛着スタイルについて、Bowlby (1973) の内的作業モデル、特に他者に関する内的作業モデルと自己に関する内的作業モデルの2次元を加味したモデルを提案した。つまり、自己と他者の2次元を軸として、

それらの組み合わせで愛着スタイルを4つに分類した。具体的には、自己と他者の2次元軸がネガティブかポジティブであるかの2方向性、つまり、自分か愛される価値はあるか否か、他者は自分を受け入れてくれるか否かによって、愛着スタイルを他者と自己の双方がポジティブな安定型、他者にはポジティブであるが自己にはネガティブなとらわれ型、他者にはネガティブであるが自己にはポジティブな拒絶型、他者と自己の双方がネガティブな恐れ型の4類型化した。その後、Bartholomew & Horowitz (1991) はこれらの4類型を測定するための対人関係尺度（Relationship Questionnaire; RQ）を作成した。さらに、Bartholomew 以外にも、Feeney, Noller & Roberts (2000) や Brennan, Clark & Shaver (1998) が成人愛着スタイルを2次元から捉える試みを行った。

本邦でも、自己と他者の2次元から成人愛着を測定するための日本語版質問紙尺度が作成されている。例えば、Bartholomew ら (1991) の RQ の邦訳版（加藤, 1998/1999）や Brennan ら (1998) の親密な対人関係尺度（the Experiences in Close Relationship inventory; ECR）の邦訳版（中尾・加藤, 2002）がある。ただし、RQ とその邦訳版は強制選択式であるため、他の変数との数量的解析には制限があること、そしてまた、ECR とその邦訳版は恋愛対象への愛着を測定対象としているために、より一般的な他者を対象に想定した愛着の測定には適していない。そこで、これらの問題を受けて、中尾・加藤 (2004) は一般他者を想定した愛着スタイル尺度（the Experiences in Close Relationship inventory the generalized-other-version; ECR-GO）を作成した。ECR-GO は、Brennan ら (1998) の ECR の一般他者版であり、愛着や恋愛場面に限定されないより一般的な他者に関する内的作業モデルと自己に関する内的作業モデルが反映されていると考えられており、一般的他者を親密性の回避（Avoidance）、そして自己を見捨てられ不安（Anxiety）といった2次元から成人愛着の測定を行っている。

以上のように、成人愛着を測定する研究では、成人愛着スタイルとして類型化を試みる研究から、Feeney ら (2000) や中尾ら (2004) などの研究に代表されるように成人愛着スタイルを2つの愛着次元、つまり、自己に関するもの（以下、愛着不安）と他者に関するもの（以下、愛着回避）から捉えられやすいものになっていると言える。

**認知的共感性と成人愛着の関連** 愛着の問題が感情的に重要な情報をどのように処理するのかといった事柄にも影響を与えることが考えられているた

め、認知的共感性の個人差を規定する要因を検討する上で、愛着の視点も重要であると言える。

そこで、共感性と愛着の関連を検討した先行研究を見ると、早期の養育者との愛着関係が子供の共感行動の発達を促し、特に愛着における非安定型よりも安定型で共感行動が多く (Waters, Wippman & Sroufe, 1979; Kestenbaum, Farber & Sroufe, 1989)、養育者との温かく安定した愛着関係を持ってきた個人が他者に対して共感しやすいことを示唆している。また、成人を対象とした研究では、大学生の愛着スタイルと共感性の関連を見た研究からは (宮腰, 2005)、回避型よりも安定型で共有経験が高く、安定型よりも回避型で非共有経験が高いことが示され、他者との関係を否定的・拒否的に捉える個人よりも、肯定的・安定的に捉える個人の共感性が高いことが示唆される。以上のことから、特に愛着の安定型よりも回避型で共感性が低くなると言え、愛着が共感性の個人差を規定することを検討する上で示唆に富むものである。しかし一方で、成人を対象にした愛着と共感性の関連を検討した Peter & James (2005) の研究では、愛着回避が共感性の認知的側面である視点取得と相関が見られなかったが、愛着不安は視点取得と正の相関が見られるという結果を示している。

以上の先行研究からは、特に愛着回避が共感性の個人差を規定するための要因として結論づけるには検討すべき問題があると言える。そもそも、Ainsworth, Blehar, Water & Wall (1978) による愛着スタイルの古典的分類法では、回避型は養育者との分離に際し、泣いたり混乱したりする様子を示すことがほとんどなく、再会時においても、養育者を喜んで迎え入れることは少なく、養育者を避けようとする行動を特徴としている。このことは、回避型が養育者への関心を向けず、養育者との愛着欲求を無視していることが言える。また、近年、2つの愛着次元から捉えられる成人愛着において、特に愛着回避は親密な恋愛対象を超えて、より一般的な他者についての内的作業モデルが反映されている。つまり、愛着回避の高い個人は他者についての内的作業モデルがネガティブであるため、他者は自分を受け入れてくれず、関心も持ってくれず、信頼できる存在ではないという確信を抱き、他者に対して拒否的で、親密な関係を築くことを避けてしまう傾向が強い。さらに、認知的共感性に関する先行研究からは (三原, 1998)、視点取得の高さには、その主体が相手に何らかの関心を持っていたり、注意を向けていたりする必要性が指摘されており、実際に視点取得と内的他者関心意識傾向との間に正の相関が見られ

ることを明らかにしている (三原, 1998)。以上のことから、成人愛着において、特に愛着回避の高い個人は他者への関心や意識などが乏しいために、認知的共感性が低いことが予想される。

## 目的と仮説

問題で論じられた観点から、まず、認知的共感性の構成要素として「他者感情の理解」「視点役割取得」「想像性」を想定し、これら3つの構成要素を測定するための認知的共感性尺度を作成する。次に、認知的共感性尺度を用いて、成人愛着の観点から、認知的共感性の個人差を規定する要因について検討する。具体的には、成人愛着において、特に愛着回避は他者に関する意識や関心が乏しいために、結果的に認知的共感性が低くなることが予想されることから、これを検証する。

## 方 法

**調査対象者** 大学生 105 名 (男性 49 名、女性 56 名) を対象とした。平均年齢 20.3 歳 ( $SD = 1.12$ ) であった。

**調査時期** 2011 年 4 月から 5 月であった。

**調査内容** 調査内容は以下の通りであった。

①認知的共感性尺度原案：認知的共感性を構成する3つの構成要素「他者感情の理解」「視点役割取得」「想像性」を測定するために、多次元共感性尺度 (桜井, 1988)、共感性尺度 (出口・斎藤, 1990; 1991)、共感性の多次元尺度 (澤田・斎藤, 1995)、多次元共感性尺度 (鈴木ら, 2000)、青年期用多次元的特性共感性尺度 (登張, 2003) を基に、24 項目からなる原案を作成した。これらの項目について、「全く当てはまらない (1)」、「あまり当てはまらない (2)」、「どちらともいえない (3)」、「やや当てはまる (4)」、「とても当てはまる (5)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。

②援助規範意識尺度 (箱井・高木, 1987)：他者を援助することに関する規範を尋ねる 29 項目であった。これらの項目について、「非常に反対する (1)」、「反対する (2)」、「どちらともいえない (3)」、「賛成する (4)」、「非常に賛成する (5)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。なお、認知的共感性尺度の構成概念妥当性の検討のために、援助規範意識尺度の下位尺度との相関係数を算出するために用いた。

③共感性尺度 (小池, 2003)：認知的共感性と情動的共感性を測定する 13 項目であった。これらの

項目について、「全く当てはまらない (1)」、「あまり当てはまらない (2)」、「どちらともいえない (3)」、「やや当てはまる (4)」、「とても当てはまる (5)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。なお、認知的共感性尺度の併存的妥当性の検討のために、共感性尺度の下位尺度との相関係数を算出するために用いた。

④ ECR-GO 日本語版 (Brennan et al., 1998; 中尾・加藤, 2004): 成人愛着の2次元, つまり, 親密性の回避 (以下, 愛着回避) と見捨てられ不安 (以下, 愛着不安) を測定する36項目であった。これらの項目について、「全く当てはまらない (1)」、「あまり当てはまらない (2)」、「どちらともいえない (3)」、「どちらともいえない (4)」、「どちらかといえば当てはまる (5)」、「やや当てはまる (6)」、「非常によく当てはまる (7)」の7件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。

⑤ 他者意識尺度のうちの内的他者意識下位尺度 (辻, 1993): 他者の内面への意識や関心の程度を測定する7項目であった。これらの項目について、「全くそうだ (5)」、「そうだ (4)」、「どちらともいえない (3)」、「ちがう (2)」、「全くちがう (1)」の5件法で回答を求めた。

**調査手続き** 上記の調査内容について、個別配布・個別回収の自記入形式の質問紙調査で実施された。謝礼は提示していない。

## 結 果

### 1) 認知的共感性について

**認知的共感性尺度の因子分析結果** 認知的共感性の因子構造を検討するために、認知的共感性尺度原案に含まれる24項目について、因子分析 (主因子法・バリマックス回転) を行った。まず、固有値の推移と因子の解釈可能性から、3因子構造が妥当であると判断した。次に、因子数を3に設定し、再び因子分析を行った結果、当該因子に因子負荷量が.40以下の項目、ならびに複数の項目に.40以上の因子負荷量を示す項目を削除して、項目の精選を行った。その結果、第1因子には、「相手が声に出して言わなくても、私はその相手が何を感じているのか正確にわかる」「他の人が今どのような気持ちかが、その人の様子やしぐさからわかる」等の他者の感情を推測・理解することを示す項目が高い因子負荷量を示したため、「他者感情の理解」と命名した。第2因子には、「相手の視点に立って、その人が感じている楽しさを理解するようにしている」「相手をよく理解するために、相手の立場になって考えようと

する」等の他者の視点や立場、役割に立とうとすることを示す項目が高い因子負荷量を示したため、「視点役割取得」と命名した。第3因子には、「映画や本の主人公とともに、喜んだり悲しんだりする」「小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない」等の架空の登場人物の気持ちや行動に自分自身を当てはめたり、同一化することを示す項目が高い因子負荷量を示したため、「想像性」と命名した。これらの項目及び因子負荷量などをTable 1に示す。

**認知的共感性尺度の信頼性** 認知的共感性尺度の信頼性を確認するために、Table 1に示された各因子においてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「他者感情の理解」では $\alpha = .75$ 、「視点役割取得」では $\alpha = .67$ 、「想像性」では $\alpha = .72$ と一定の信頼性が示された。

**認知的共感性尺度の妥当性** 認知的共感性尺度の構成概念妥当性を検討するために、援助規範意識尺度 (箱井・高木, 1987) を構成する下位尺度との相関係数を算出した (Table 2)。その結果、「他者感情の理解」は自己犠牲規範意識と弱者救済規範意識で有意な正の相関が見られた。「視点役割取得」では、自己犠牲規範意識で有意な正の相関が見られた。「想像性」に関しては、援助規範意識尺度のどの下位尺度にも有意な相関は見られなかった。次に、併存的妥当性を検討するために、共感性尺度 (小池, 2003) の下位尺度との相関係数を算出した (Table 2)。その結果、「他者感情の理解」は認知的共感性と情動的共感性で有意な正の相関が見られ、特に認知的共感性が情動的共感性よりも相関係数が高いことが示された。「視点役割取得」では、認知的共感性でのみ有意な正の相関が見られた。「想像性」では、情動的共感性でのみ有意な正の相関が見られた。

### 2) 成人愛着、内的他者意識、そして、認知的共感性との関連について

**成人愛着、内的他者意識、認知的共感性の相関分析** まず、成人愛着、内的他者意識、そして、認知的共感性の各変数の相関係数を算出した (Table 3)。その結果、愛着不安は、認知的共感性の視点役割取得との間に有意な負の相関が見られた ( $r = -.374$ ,  $p < .01$ )。また、愛着回避は、認知的共感性の他者感情の理解との間に有意な負の相関 ( $r = -.243$ ,  $p < .05$ )、視点役割取得との間に有意な負の相関 ( $r = -.208$ ,  $p < .05$ )、内的他者意識と有意な負の相関が見られた ( $r = -.225$ ,  $p < .05$ )。さらに、内的他者意識は、認知的共感性の他者感情の理解との間に有意な正の相関 ( $r = .584$ ,  $p < .01$ )、認知的共感性の視点役割取得との間に有意な正の相関が見

られた ( $r = .392, p < .01$ )。

**成人愛着、内的他者意識、認知的共感性の重回帰分析** 成人愛着、内的他者意識、そして、認知的共感性の各変数間の関係を検討するために、重回帰分析の組合せを用いたパス解析を行った。具体的には、仮説に従って、第一水準を成人愛着における愛着不安と愛着回避、第二水準を内的他者意識、第三水準を認知的共感性における他者感情の理解、視点役割取得、想像性とした。解析は変数増加法の重回帰分析を行い、第三水準の認知的共感性における他者感情の理解、視点役割取得、想像性を基準変数として第一水準の成人愛着における愛着不安と愛着回避、第二水準の内的他者意識を説明変数とする解析と、

第二水準の内的他者意識を基準変数として第一水準の成人愛着における愛着不安と愛着回避を説明変数とする解析を行った。いずれも、標準偏回帰係数の有意水準5%基準で、投入を打ち切った。認知的共感性の各下位尺度において、それを規定する諸変数との関係は以下の通りであった (Fig 1, 2)。

まず、認知的共感性の「他者感情の理解」を規定する諸変数との関係は次の通りであった。つまり、愛着回避は、内的他者意識に対して有意な負の影響を与え ( $\beta = -.232, p < .05$ )、内的他者意識は他者感情の理解に有意な正の影響を与えていた ( $\beta = .556, p < .01$ )。また、愛着不安は、他者感情の理解に有意な正の影響を与えていた ( $\beta = .185,$

Table 1 認知的共感性の因子分析結果

項目番号	項目内容	第1因子	第2因子	第3因子	
第1因子：他者感情の理解 $\alpha = .75$					
項目7	相手が声に出して言わなくても、私はその相手が何を感じているのか正確にわかる	.759	-.042	.045	
項目23	他の人が今のような気持ちかが、その人の様子やしぐさからわかる	.711	.113	.062	
項目12	人の気持ちを理解するのに苦勞することはない	.527	.158	.018	
項目16	相手が不安になっているのを見て、その人の不安を理解できる方である	.488	.077	.057	
項目19	議論しているときは、私には相手が自分の考えにどのような気持ち(感情)をもっているかわかる	.47	.081	-.211	
項目2	相手が悩んでいるとき、相手の立場に立って一緒に考えようとする	.469	.229	.357	
第2因子：視点・役割取得 $\alpha = .67$					
項目8	相手の視点に立って、その人が感じている楽しさを理解するようにしている	.272	.635	.07	
項目13	相手をよく理解するために、相手の立場に立って考えようとする	.296	.617	.142	
項目15	自分と反対の意見をもつ人がいれば、その人の立場にも立ちながら、両方を考慮するように努力する	-.007	.519	-.078	
項目17	相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない	.28	.494	-.243	
項目20	映画を見ながら涙を浮かべたり、泣いたりしている人を見ると、おかしいと感じることがある	-.145	.401	.255	
第3因子：想像性 $\alpha = .72$					
項目4	映画や本の主人公とともに、喜んだり悲しんだりする	0	.106	.797	
項目9	小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない	-.015	-.046	.792	
項目11	小説を読むとき、登場人物の気持ちになりきってしまう	.131	.003	.728	
項目6	感動的な映画を見た後は、その気分いつまでも浸ってしまう	.018	.043	.671	
		因子寄与	2.3	1.6	2.5

Table 2 認知的共感性尺度と援助規範意識尺度および共感性尺度の相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥
他者感情の理解	.082	.336**	-.003	.220*	.419**	.342**
視点役割取得	.173	.233*	-.162	-.022	.565**	.134
想像性	.052	.115	-.009	.013	-.079	.302**

注) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

①返済規範意識 ②自己犠牲規範意識 ③交換規範意識 ④弱者救済規範意識

⑤認知的共感性 ⑥情動的共感性

Table 3 成人愛着, 内的他者意識, 認知的共感性の相関分析

	①	②	③	④
愛着不安	.014	-.190	-.374**	.144
愛着回避	-.225*	-.243*	-.208*	-.047
内的他者意識	1	.584**	.392**	.094

注) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

①内的他者意識 ②他者感情の理解

③視点役割取得 ④想像性

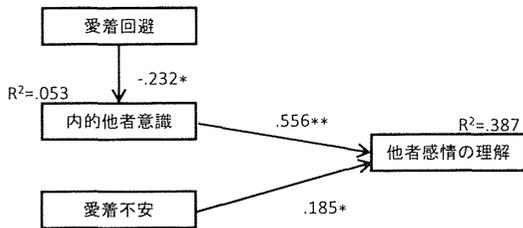


Fig. 1 他者感情の理解を規定する諸変数との関係

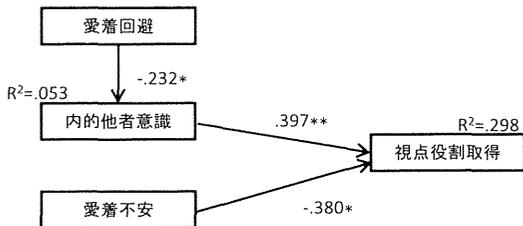


Fig. 2 視点役割取得を規定する諸変数との関係

$p < .05$ ).

次に, 認知的共感性の「視点役割取得」を規定する諸変数との関係は次の通りであった。つまり, 愛着回避は, 内的他者意識に対して有意な負の影響を与え ( $\beta = -.232$ ,  $p < .05$ ), 内的他者意識は視点役割取得に有意な正の影響を与えていた ( $\beta = .397$ ,  $p < .01$ )。また, 愛着不安は, 視点役割取得に有意な負の影響を与えていた ( $\beta = -.380$ ,  $p < .01$ )。

なお, 認知的共感性の「想像性」を規定する諸変数との関係を検討したところ, 各諸変数との間に有意な影響は見られなかった。

## 考 察

### 1) 認知的共感性について

**認知的共感性尺度の因子構造** 認知的共感性の3つの構成要素, つまり, 「他者感情の理解」, 「視点役割取得」, 「想像性」を測定する尺度を作成し, 因

子分析をした結果, 3つの因子構造が確認された。「他者感情の理解」は他者が抱いている感情状態を推測し, 理解することを示す因子であり, それは Feshbach (1976) の共感モデルで提唱されているように, 共感性の3水準の1つである「他人の情動状態を弁別し, それを命名する能力」に相当すると考えられる。また, 「他者感情の理解」は古くから共感性の認知的側面の中心要素として注目されてきたものであり, 「他者感情の理解」が高い個人は他者が抱いている感情状態をより正確に推測・理解する側面を有していることが考えられる。「視点役割取得」は日常場面で他者の心理的視点に立つことを示す因子であり, Davis (1983) の「視点取得」や Hoffman (1984) の「役割取得」に相当するものであると考えられる。また, 「視点役割取得」は現在では共感性の認知的側面として重要な要素として位置づけられており, 本研究でも「他者感情の理解」と同様に, 確認された。「想像性」は本や映画など架空の登場人物の気持ちや行動に自分自身を当てはめることを示す因子である。Davis (1983) の IRI でも測定対象となっている「想像性」に相当するものであることが考えられる。

以上のことから, これまでの先行研究間では共感性の認知的側面を構成する要素が一貫していなかったのに対して, 本研究の結果, 共感性の認知的側面としてより重要な構成要素を包括して捉え得ることが示されたのではないかと考えられる。

**認知的共感性尺度の信頼性および妥当性** 認知的共感性尺度の信頼性を確認した結果, 一定の内的整合性が得られた。また, 構成概念妥当性を確認するために, 箱井・高木 (1987) の援助規範意識尺度との関連を検討した。その結果, 「他者感情の理解」は自己犠牲規範意識と弱者規範意識の間に正の相関が示された。「視点役割取得」は返済規範意識とのみ正の相関が示された。一方, 「想像性」は援助規範意識尺度を構成するどの下位尺度とも相関が示されなかった。さらに, 併存的妥当性を確認するために, 共感性尺度 (小池, 2003) の各下位尺度との関連を検討した結果, 「他者感情の理解」と「視点役割取得」の双方が認知的共感性と有意な正の相関が見られた。ただし, 「他者感情の理解」は情動的共感性とも正の相関が見られたが, 情動的共感性よりも認知的共感性が高い相関係数を示しており, 情動的側面よりも認知的側面を反映していることが大きいことが示唆される。一方, 「想像性」は情動的共感性のみと正の相関が見られた。以上のことから, 「他者感情の理解」と「視点役割取得」に関しては, 認知的共感性としてある程度の妥当性が示された

言える。しかし、本研究の結果からは、情動的共感性と関連が見られており、「想像性」を認知的共感性に含めるかどうかについては検討の余地が残った。「想像性」の質問項目を見ると、例えば「映画や本の主人公とともに、喜んだり悲しんだりする」など他者の感情状態について個人内に感情的反応を生じさせているものであり、共感性の感情的側面を表わしている内容に近いと言える。また、「想像性」は援助規範意識尺度との関連は見られなかったことに関しては、Batson, Bolen, Cross & Neuringer-Benefiel (1986) は想像性が援助との相関が有意でない結果を示しており、援助以外の他の概念との関連を検討することで、構成概念妥当性を検証していく必要性も考えられる。しかし、「想像性」自体を共感性の構成要素として含めるべきかどうかを疑問視している研究者もおり（葉山ら, 2008）、今後、「想像性」を認知的共感性、さらには共感性そのものの構成要素として含めるべきかどうかについては検討する必要があるだろう。

## 2) 成人愛着、内的他者意識、そして、認知的共感性との関連について

本研究における仮説を検証するために、内的他者意識と認知的共感性について、成人愛着との関連を重回帰分析の組み合わせによるパス解析を用いて検討した。その結果、愛着回避から内的他者意識に負のパスを経て、さらに内的他者意識から他者感情の理解および視点役割取得へと至る正のパスが示され、仮説を支持するものであった。つまり、成人愛着において、愛着回避は他者に対する関心や意識が低いために、認知的共感性が乏しくなることが示されたと言える。ただし、それは愛着回避が認知的共感性の個人差を直接的に規定せず、予測力は弱いものであることを示唆するものである。むしろ、本研究からは、愛着回避と認知的共感性の関連は内的他者意識を媒介にして説明や予測することが可能であることが示された。また、Peter ら (2005) の研究で愛着回避と視点取得に相関が見られないことを示したが、本研究でもこれを支持する結果となった。ただし、そのことは愛着回避が認知的共感性の個人差を規定するための予測力としては弱いことを示唆するものであるが、今後は、なぜ愛着回避が認知的共感性と直接に関連しないのかを検討していくことが必要であろう。

一方で、愛着不安に関しては、愛着不安から内的他者意識に影響を与えることはなく、愛着不安から他者感情の理解および視点役割取得に直接のパスが示された。つまり、成人愛着において、愛着不安は

他者に対する関心や意識を介さずに、直接的に認知的共感性の個人差を規定する要因であることが示唆されたと言える。ただし、愛着不安では、他者感情の理解には正のパスが示されたのに対して、視点役割取得には負のパスが示された。ただし、愛着不安から視点役割取得に負のパスが引かれたことについては、Peter ら (2005) の研究で愛着不安は視点取得と正の相関が示された結果とは整合的に対応するとは言えないが、Peter ら (2005) で示された愛着不安と視点取得の正の相関係数は  $r = .15$  と非常に低い値である。そもそも、愛着不安は自己に関する内的作業モデルが反映されており、愛着不安の高い個人はネガティブな自己に関する内的作業モデルを有する。つまり、自分が他者から十分愛される人間であるという確信は低く、自分の価値や評価を低く見積もることを特徴とする。また、Davis (1983) によれば、視点取得と自尊心には正の相関関係があることを報告していることも勘案すれば、愛着不安の高い個人にとっては、自分に対する評価感情が低く、自分自身を価値ある存在とする感覚が乏しいために、他者の考えや立場に立って、他者の状況をより正確に理解しようとするのが困難であることが考えられる。一方、他者感情の理解に関しては、愛着不安から他者感情の理解に正のパスが引かれたが、標準偏回帰係数が  $\beta = .185$  と非常に弱い値であり、愛着不安の高さから他者感情をより正確に理解する程度にそれほど大きく影響するものではないことが示唆される。以上のことから、愛着回避よりも愛着不安において、認知的共感性の個人差を規定する際の直接的な予測力を持つことが強いことが示唆された。また、成人愛着の2次元、つまり、愛着回避と愛着不安の違いによっては、認知的共感性の個人差を規定するメカニズムが異なることが示唆されたが、今後は、なぜこうした違いが生じるのかについても検討する必要もあるだろう。そのことで、成人愛着の観点から、認知的共感性の個人差を規定する要因についてモデルをより精緻化することが可能になるだろう。

## 引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Water, E. & Wall, S. (1978). Patterns of attachment. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. (1991).

- Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Batson, D.D., Bolen, M.H., Cross, J.A. & Neuringer-Benefiel, H.E. (1986). Where is the altruism in the altruistic personality? *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 212-220.
- Batson, D.D. (1987). Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, New York: Academic Press. Pp. 65-122.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, Vol.2: Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychology*, **130**, 201-210.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss, Vol.3: Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationship*. New York: The Guilford Press. Pp. 46-76.
- Broke, H. (1971). Interpersonal perception of young children; Egocentrism or empathy. *Developmental Psychology*, **5**, 262-269.
- Collins, N.L. & Read, S.J. (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships* (Vol.5, Pp. 53-90). London: Jessica Kingsley.
- Davis, M.H. (1994). Empathy. A social psychological approach. Westview Press. (菊池章夫(訳) (1999) 共感の社会心理学 川島書店)
- Davis, M.H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, **10**, 85.
- Davis, M.H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- 出口保行・斎藤耕二 (1990). 共感性尺度の因子分析的研究 東京学芸大学紀要, **41**, 183-199.
- 出口保行・斎藤耕二 (1991). 共感性の発達の研究 東京学芸大学紀要, **42**, 119-134.
- Dymond, R.F. (1948). A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, **12**, 127-133.
- Feeney, J.A., Noller, P. & Roberts, N. (2000). Attachment and Close Relationships. In C.Hendrick & S.S.Hendrick (Eds.), *Close Relationships* (Pp.185-201). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Feshbach, N.D. (1987). Parental empathy and child adjustment/maladjustment. In N. Eisenberg, & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press. Pp. 271-291.
- Feshbach, N.D. (1976). Empathy in children. Paper given at the Western Psychological Association meetings, Los Angeles.
- Fonagy, P., Steele, H. & Steele, M. (1991). Maternal representation of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, **62**, 891-905.
- 箱井英寿・高木 修 (1987). 援助規範意識の性別・年代, および, 世代間の比較 社会心理学研究, **3**, 39-47.
- 葉山大地・植村みゆき・荻原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・桜井茂男 (2008). 共感性プロセス尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, **36**, 39-48.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hoffman, M.L. (1982). Development of prosocial motivation: Empathy and guilt. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press.
- Hoffman, M.L. (1984). Interaction of affect and cognition in empathy. In C.E. Izard et al (Ed.), *Emotion, cognition, and behavior*. New York: Cambridge University Press. Pp.103-131.
- Hoffman, M.L. (1987). The contribution of empathy to justice and moral judgement. In N. Eisenberg, & J.Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press. Pp.47-80.
- Hoffman, M.L. (2000). Empathy and moral

- development: Implications for caring and justice. Cambridge: Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美(訳)(2001)共感と道徳性の発達心理学: 思いやりと正義のかかわりで 川島書店)
- Hogan, R. (1969). Development of an empathy scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 307-316.
- 加藤和生 (1998/1999). Bartholomew らの4分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.
- 川田裕次郎・田中純夫・杉浦 幸・山田泰行・今野 亮・中島宣行 (2007). 中学生運動部員における反応的攻撃性と身体状況認識および認知的共感性との関連 順天堂大学スポーツ健康科学研究, **11**, 49-57.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亚希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, **48**, 323-332.
- Kestenbaum, R., Farber, E.A. & Sroufe, L.A. (1989). Individual differences in empathy among Preschoolers: Relation to attachment history. In N. Eisenberg (Ed.), *Empathy and related emotional responses*. Jossey-Bass Inc.
- 小池はるか (2003). 共感性尺度の再構成一場面想定法に特化した共感性尺度の作成— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **50**, 101-108.
- Litvack-Miller, W., McDougall, D. & Romney, D.M. (1997). The structure of empathy during middle childhood and its relationship to prosocial behavior. *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, **123**, 303-324.
- Main, M., Kaplan, N. & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 66-104.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 523-543.
- 三原 亘 (1998). 共感性尺度の認知的側面に関する一研究 性格心理学研究, **6**, 2, 152-153.
- 宮腰裕子 (2005). 愛着スタイルと大学生の心理的特性との関連—内的作業モデルが共感性や自己開示に与える影響について— 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, **7**, 207-213.
- 長田在代・川上綾子 (2008). グループ学習の話し合いにおける認知的共感性の影響 日本教育工学会論文誌, **32**, 141-144.
- 登張真稲 (2000). 多次元視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, **9**, 36-51.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 中尾達馬・加藤和生 (2002). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成 九州大学人間環境学府心理学教室 (未公開)
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者” を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- Peter, C.B. & James, M.F. (2005). The relation among varieties of adult attachment and the components of empathy. *The Journal of Social Psychology*, **145**, 519-530.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感想定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, **37**, 149-153.
- 澤田瑞也・斎藤誠一 (1995). 共感性の多次元尺度作成の試み 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, **71**.
- 澤田瑞也・斎藤誠一 (1996). 共感性の多次元尺度作成の試み (2) 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, **68**.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigation of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, **14**, Pp.271-314.
- 辻平治朗 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房.
- 鈴木有美・木戸和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学教育学紀要, **47**, 269-279.
- Waters, E., Wippman, J. & Sroufe, L.A. (1979). Attachment, positive affect, and competence in the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development*, **50**, 821-829.

(受稿9月30日: 受理10月11日)